

子どもが学びをつなぐ体育科学習

体育科

山本 亮
黒木 敬博



研究テーマについて

1 深い学びのある授業のなかで見てきた子どもの姿

昨年度までの研究により、以下のような子どもの姿が見えてきた。

- 段階的な運動課題に取り組む学習活動をとおして、運動の苦手な子どもも小さな「できた！」を経験し、主体的に運動を行うようになってきた。
- 運動者と運動観察者の立場の往還により、子ども同士で言語的・非言語的な身体の対話が生まれ、自分や仲間の身体から動きについての気付きを得ることができるようになってきた。

体育科研究部が捉える「身体の対話」とは… ※昨年度までの研究より

- ・ 運動中の短い言語的なやりとり
- ・ 運動中の非言語的なかわり
- ・ 動きや思考の言語化
- ・ 仲間の動きの観察や模倣

2 学びをつなぐ姿

体育科は、身体的活動を主とし、自他の言語的・非言語的な身体の対話によって運動（動き）そのものを学びの対象とする教科である。体育科研究部では、「学びをつなぐ姿」を以下のように捉えている。

- 言葉や動作等による身体の対話をとおして仲間と協働的に学ぶことで、特性に応じた各種の運動の行い方を理解し、「する」「みる」「支える」「知る」等、運動への多様なかわりができる。
- 様々な動きや運動を経験するなかで、それらに内在する「共通性」や「汎用性」を見いだすとともに、仲間の身体から得た動きのポイントを基に、自分なりにつかんだコツを生かしてスムーズに身体を動かすことができる。

総合的な学習の時間や生活科及び特別活動とかがわる資質・能力について

心と体を一体として捉える体育科は、生きる力を育む全ての学びの基盤となる。これを踏まえ、体育科研究部では、本研究と総合的な学習の時間や生活科及び特別活動とかがわる資質・能力を以下のように捉えている。

1 総合的な学習の時間や生活科とかがわる資質・能力

- 探究的な学習（ゲームにおける作戦等）において、自他を尊重し、主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら積極的に活動に参画しようとする。
- 言語による知識としての学びを動作化することで、自分自身の身体と向き合い、習得した知識や技能の有用性を実感し、様々な場面において、汎用的に活用する。

2 特別活動とかがわる資質・能力

- 多様な他者と協働する集団活動（集団マットやボールゲーム等）において、互いのよさや可能性を発揮しながら、課題を解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定をしたりする。

研究内容

- 1 子どもが体育の見方・考え方を働かせる学習課題の設定と言葉かけの在り方
 - (1) 身体を動かすことに夢中になり、運動（動き）そのものの楽しさや喜びを実感するための手立て
 - (2) 課題解決に必要な運動（動き）を焦点化し、目的を明確にした身体との対話にするための手立て
- 2 学びの自覚を促したり、自己のよりよい動きへ導いたりするふりかえりの在り方
 - (1) 意識して体を動かしたり、身体との対話をしたりしやすくするための手立て
 - (2) 自分自身の身体と向き合い、学びを自覚し、自己のよりよい動きへとつなげていくための手立て

研究内容の基本的な考え方

1 子どもが体育の見方・考え方を働かせる学習課題の設定と言葉かけの在り方

「小学校学習指導要領解説 体育編」によると、体育の見方・考え方とは、

運動やスポーツは、特性に応じた楽しさや喜びがあることと体力の向上につながっていることに着目するとともに、「すること」だけでなく、「みること」「支えること」「知ること」など、自己の適性に応じて、運動やスポーツとの多様な関わりについて考える。

と示されている。この見方・考え方を働かせていくことで、仲間との協働的な学びが生まれ、体育科研究部がめざす学びをつなぐ姿に迫れると考える。そこで、上記を追究するべく、以下の手立てを講じる。

(1) 身体を動かすことに夢中になり、運動（動き）そのものの楽しさや喜びを実感するための手立て

子どもの実態（「〇〇できるようになっている」「〇〇したい」等）を基に、学習課題を設定することで、「やってみよう」「仲間と力を合わせて解決したい」等の思いをもたせ、課題解決に向けて夢中で身体を動かし、運動（動き）そのものの楽しさや喜びを実感させたい。

(2) 課題解決に必要な運動（動き）を焦点化し、目的を明確にした身体との対話にするための手立て

動きの習得段階に応じた言葉かけを行うことで、運動者や運動観察者に動きについて考える視点を与え（焦点化）、課題解決に向けた子ども同士の言葉や動作等による身体との対話を促したい。

2 学びの自覚を促したり、自己のよりよい動きへ導いたりするふりかえりの在り方

自分の身体を意識的に思うような動きへと近付けるためには、身体との対話をとおして得た気づきを言語化するだけでなく、動作化することが大切である。また、その過程において、習得した知識や技能の有用性を実感することも大切である。そのためには、学びを適切にふりかえることが必要である。

そこで、学びの自覚を促したり、自己のよりよい動きにつなげたりしていくふりかえりはどうあればよいかを、以下の手立てを講じることにより追究していく。

(1) 意識して体を動かしたり、身体との対話をしたりしやすくするための手立て

身体との対話をとおして得た気づきを、自分の身体で体現する機会を設定することで、「できた！」「分かった！」が実感できるようになると考える。そこで、「途中ふりかえり」を行い、仲間の身体から得た気づきを動きのポイントとして言語化して共有することで、それを基に身体との対話が行えるようにしていきたい。

体育科研究部が捉える「途中ふりかえり」とは… ※昨年度までの研究より
1 単位時間の途中に行う、動きのポイント等を共有する機会

(2) 自分自身の身体と向き合い、学びを自覚し、自己のよりよい動きへとつなげていくための手立て

学びのふりかえりにおいて、自分自身の動きをふりかえらせる発問をし、実感したことを付箋紙に記述し言語化させることで、動きについての学びを自覚させたい。

研究の実際

1 子どもが体育の見方・考え方を働かせる学習課題の設定と言葉かけの在り方

(1) 身体を動かすことに夢中になり、運動（動き）そのものの楽しさや喜びを実感するための手立て

第2学年 多様な動きをつくる運動遊び「いろいろ うごいて2」～第4時～

【実態】上手く体重移動をし、腕を振りながらボールに力を伝えて「打つ」動きが習得できていない。

【学習課題】：いろいろなボールの打ち方をして遊ぼう。

※意図…力を加減しながら、いろいろな打ち方（上から打つ、横から打つ等）で目標エリアへボールを打つ運動遊びを行わせることで、ボールゲームへの汎用性の高い「強く打つ」動きを高めていくため。

→ 自己の課題に適した場を選ばせて運動させることで、「〇〇まで打つことができた！」と喜ぶ姿が見られた。



【仲間と運動する様子】

第3学年 ネット型ゲーム「テニラケッシュ」～第5時～

【実態】直接返球「できる」「できない」にかかわらず、一度捕球してから返球している。そのため、打つ動きを連続させるおもしろさを十分に味わえていない。

学習課題：(キャッチせずに) どんなボールもうまく返球するためには、どうすればよいのかな？

※意図…相手から返球されたボールの捕球をしない規則に変更することで、ボールを操作しやすい位置に移動する動きを段階的に高めていくため。

→ 捕球をしない規則に変更したことで、うまく返球するためにどうしたらよいか試行錯誤しながら運動する姿や、仲間の動きをよく観てアドバイスをしたり、互いに声をかけ合いながら楽しそうに運動したりする姿が見られた。



【仲間と運動する様子】

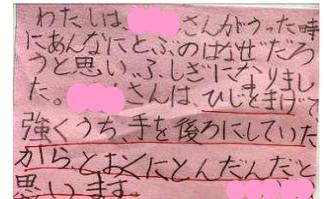
(2) 課題解決に必要な運動(動き)を焦点化し、目的を明確にした身体の対話にするための手立て

第2学年 多様な動きをつくる運動遊び「いろいろ うごいて2」～第4時～

予想される実態	動きの習得段階に応じた言葉かけ
① 打ちたいところにボールが届かない。	「ボールを投げる時のように、手を前に押し出してごらん。」
② ボールを強く打てない。	「体の後ろから、速く腕を振ってみたらどうかな。」
③ 遠くからボールを強く打てる。	「ねらったところに打てるかな。」



【②の言葉かけの様子】



【対話をとおした気づき】

→ 手や腕の動かし方に焦点化した言葉かけを行い、考える視点を与えたことで、身体の対話を促すことができた。

第3学年 ネット型ゲーム「テニラケッシュ」～第5時～

予想される実態	動きの習得段階に応じた言葉かけ
① どこで(立ち位置)打てばよいか分からない。	「ボールの左側(右側)に素早く移動してごらん。」
② コートの後ろ側からうまく返球できない。	「足を一步踏み込んで、強く腕を横に振ってみよう。」
③ うまく返球できる。	「どんなボールも壁の中心に打ち返せるかな。」

→ 一緒に動きながら言葉かけをし、具体的に動きをつかませることで、自他の動きについて身体の対話を促すことができた。



左側に素早く…

【①の言葉かけの様子】

2 学びの自覚を促したり、自己のよりよい動きへ導いたりするふりかえりの在り方

(1) 意識して体を動かしたり、身体の対話をしたりしやすくするための手立て

第2学年 多様な動きをつくる運動遊び「いろいろ うごいて2」～第4時～



【「途中ふりかえり」の様子】



【自分の身体で体現する様子】

→ 2つの運動遊びの間に「途中ふりかえり」を行い、強く打つための動きのポイントを全体で共有した。そうすることで、自分なりにつかんだ動きのこつを基に意識して身体を動かし、「できた!」「分かった!」を実感する子どもの姿があった。

第3学年 ネット型ゲーム「テニラケッシュ」～第5時～



キャッチできないよ。どう動く?

【「途中ふりかえり」の様子】



ボールのちょっと左に動いて…

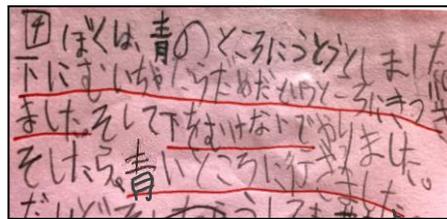
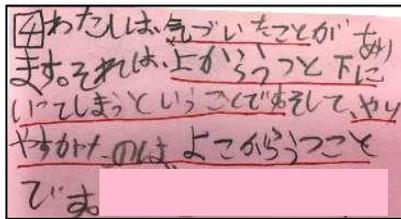
【自分の身体で体現する様子】

→ ゲーム1と2の間に「途中ふりかえり」を行い、返球するための動きのポイントを全体で共有することで、ゲーム2では意識して身体を動かす運動者や、助言する観察者の姿があった。

(2) 自分自身の身体と向き合い、学びを自覚し、自己のよりよい動きへとつなげていくための手立て

第2学年 多様な動きをつくる運動遊び「いろいろ うごいて2」～第4時～

発問：どのような打ち方をしたら、打ちたいところにボールを打つことができた？

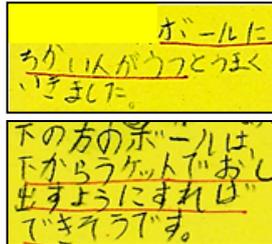
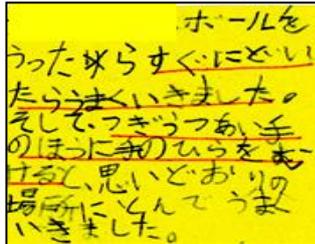


→ 前時までの学びと関連付けながら、身体の対話をとおして得た気づきを言語化させることで、その動きの有用性を実感させることができた。

【付箋紙でのふりかえり】

第3学年 ネット型ゲーム「テニラケッシュ」～第5時～

発問：うまく返球するために、どうした（どうするとよい）？



→ 仲間の身体から得た気づき（「途中ふりかえり」において抽象化した動きのポイント）を基に動作化した。そうしたことで、自分なりの動きのこつをつかむことができた（具体化）。さらにその動きの有用性について実感したことを言語化させることで、学びを自覚させることができた。

【付箋紙でのふりかえり】

今年度の研究のまとめ

1 子どもが体育の見方・考え方を働かせる学習課題の設定と言葉かけの在り方

(1) 身体を動かすことに夢中になり、運動（動き）そのものの楽しさや喜びを実感するための手立て

- 課題解決に向けて、より仲間と運動に夢中にさせるためには、子どもの実態（運動経験や動きの習得状況等）に応じた学習課題を設定することが大切である。また、規則を変更する場合には、動きの習得状況に即したものであるかが重要である。

(2) 課題解決に必要な運動（動き）を焦点化し、目的を明確にした身体の対話にするための手立て

- 課題解決に向けて身体の対話をさせる際に、動きの焦点化を図るためには、学ばせたいこと（身に付けさせたい動き等）を明確にした学習課題の設定が必要であると考えられる。
- 個々の身体の動きやその要因は様々である。そのような子ども同士での身体の対話を促すには、動きのポイントを基にして、さらに個々の実態に応じた言葉かけの仕方（内容、タイミング、伝え方等）をする必要があった。

2 学びの自覚を促したり、自己のよりよい動きへ導いたりするふりかえりの在り方

(1) 意識して体を動かしたり、身体の対話をしたりしやすくするための手立て

- 「途中ふりかえり」を行い、仲間の身体から得た気づきを基に動きのポイントとして言語化して共有させることで、課題解決に向けて身体の対話をしながら動作化することを促すことができる。

(2) 自分自身の身体と向き合い、学びを自覚し、自己のよりよい動きへとつなげていくための手立て

- 実感したことを付箋紙に書いて言語化させることで、学びを自覚し、自己のよりよい動きへとつなげることができる。
- よりよい動きへと導くには、「途中ふりかえり」や学習のふりかえり（終末）に加え、活動中に互いに動きを評価するような自発的なふりかえりを促す手立てが必要であった。
- 単元が進むにつれて段階的に高まる学習課題に対し、学びの積み上げを着実にを行うことで、解決に必要な自己の動きが焦点化されていくことが望ましい。チームスポーツを行ううえでは、さらに個々の学びを仲間とどのように共有させていくかが課題である。

参考文献：「資質・能力」を育むボール運動の授業づくり	岩田 靖他	大修館書店	2018
体育における「学び合い」の理論と実践	梅澤 秋久	大修館書店	2018
体育における「学びの共同体」の実践と探求	岡野 昇、佐藤 学	大修館書店	2015
新しいボールゲームの授業づくり	高橋健夫他	大修館書店	2010